『比較民俗研究』15. 1997／6

研究ノート

川村湊著『「大東亜民俗学」の虚実』を巡って
―柳田國男の思想（戦争観）を中心に―

安　彩模※

1．はじめに

民俗学の方法や在り方に対して，外部から批判なり疑問の声が出始まって久しい。本書（川村　湊著『「大東亜民俗学」の虚実』講談社選書メチエ，講談社，1996）も大ざっぱにみればその一種としてとらえることができるが，突き詰めていえば日本民俗学を切り開いた柳田国男の思想と民俗学の創設期と確立期，そしてその後の学史の流れの方向性に対して強い不信感を投げかけている書物として受け止めることができる。

本書の内容構成は次の通りである。

はじめに　「大東亜民俗学」の起源
第一章　朝鮮民俗学の成立
　1，『朝鮮史』と檀君論争
　2，朝鮮民俗学の黎命
　3，朝鮮民俗学会と「朝鮮民俗」
　4，「植民地民俗学」への批判
第二章　柳田国男と「朝鮮」
　1，柳田国男と「朝鮮民俗」
　2，クグツ及びムーダン
　3，柳田学の転換とその影響
　4，秋葉隆の朝鮮民俗学
　5，朝鮮民俗学と日本民俗学
第三章　「民俗台湾」の人々
　1，台湾民俗学前史
　2，柳田国男と台湾
　3，山と雲と蕃人と
　4，「民俗台湾」と台湾民俗学
第四章　南溟の民族・民俗学
　1，南の果ての日の丸
　2，柳田・松岡兄弟の「南洋群島」
　3，科学者・芸術家・小説家
　4，光と風と青蜥蜴の夢
第五章　幻の“満洲民俗学”
　1，大間知篤三の“民族学”
　2，「西北研究所」の人々
　3，“満洲”へ行った人たち

本書は，上記の構成からも窺えるように，朝鮮・台湾・南洋群島・満州民俗学史を辿りながら柳田国男とのつながりを探り，柳田の姿勢や思想に疑問を示し，日本民俗学の在り方を問いただす形になっている。それ故，「柳田国男」や「民俗学」というキーワードは頻繁に出てくるが，純粋民俗学の書ではなく，日本全土が軍国主義に染まっていた戦前という時代的な背景から歴史・政治的接点からアプローチしている印象が強い。そういう意味からすれば，これまで出されたいわゆる“柳田（学）批判”書とはやや異なる側面からの厳しい「批判」書で，その波は日本民俗学という学問の領域まで及んでいる。

ところで，日本民俗学に対する批判は柳田の批判に繋がる事柄も少なくないが全てがそうとは限らない。しかし，柳田（論）に対する批判はほとんどがそのまま日本民俗学への批判と直結され，結局民俗学という学問の批判に化けてしまうと言っても過言ではない。それは日本民俗学における柳田国男の陰がそれだけ大きいともいえるが，他方，日本民俗学を批判するため，その方法として学問の根幹をなす柳田論そのものの批判から始まることもすくなくないからでもあろう。

※筑波大学大学院地域研究研究科

本書の「はじめに」という部分は，単なるまえがきのような性格ではなく，本書全体を貫いている著者のある意図が込められていると思われる。というのは，著者は書の冒頭に著者独自の見方から，「大東亜民俗学の起源」について説いている。これは，日本民俗学における帝国主義に基づく大東亜思想とでも言えるもので，これまであまり議論されることのなかった問題である。つまり，柳田学と大東亜共栄主義とを結び付け，そこから柳田の思想と日本民俗学の（一面の）姿を見出そうという試みであるが，これを受け本論文では柳田の言動や著作，そして伝記をはじめとする柳田研究書を交じえながら本書の論をもう一度検証してみることにする。

2．柳田と大東亜民俗学

周知の如く，大東亜共栄圏というのは，大日本帝国のアジア侵略戦争に正当な意味を吹き込むために帝国主義者たちによって作り上げられた造語であるが，その〈大東亜共栄圏〉というスローガンの下に〈大東亜民俗学〉が実在したであろうか。その問題について著者はそれをきっぱり否定しながらも一九四三年十月十七日，東京・成城の柳田国男邸で行われた座談会での柳田の話を取り上げたうえ，柳田があたかも大東亜民俗学を構想ないし支持していたかのように断定して述べているところが気になる。この座談会の話のやりとりは，当時台湾で出されていた雑誌『民俗台湾』（一九四三年十二月号）に「柳田国男氏を囲みて－大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命」という題を付せられて掲載されたという。この座談会において台北帝国大学教授の金関丈夫は，

> 「柳田先生として，日本の民俗学或は東亜の民俗学のために，台湾からはかういふ研究を期待してゐる。或は現在具体的にこれこれのことを調べてもらひたいといふやうな，さういう御指導と御希望とを伺ひまして，我々の参考にしたいと思ふわけなのでございます〉といっている。柳田はそこで〈大東亜統一といふ大きな問題が起ると，いよいよそれが強く考へられるのであります，といい，「民俗台湾」のように台湾という場所をフィールドに持っているということは，「大東亜圏民俗学」とでもいふやうなものを目標として進むには非常にいい稽古台である」といったのである。（本書P．6）

確かに，柳田国男は「大東亜圏民俗学」という言葉を発しているが，それが植民地主義や軍国主義の大東亜共栄圏に因んだ意味の言葉だったのであろうか。それには幾つかの疑問を抱かざるを得ないのである。まず，柳田のいった「大東亜圏民俗学」という言葉に大東亜共栄圏あるいは植民地のイメージの想定ないし前提が全くなかったとはいえないが，それは，時代的に置かれた状況であり，その発言はむしろ地域を指す意味での言葉（今日の「アジア民俗学」のようなもの）としての認識が強かったのではないかと思われる。というのは，上記の座談会で柳田は，大東亜統一を「達成」とか「成し遂げる」といった表現ではなく「…といふ大きな問題が起ると…」といっているし，いよいよそれが強く，「求められる」あるいは「要求される」といった言い方ではなく「考へられる」といっている。言葉の微妙なニュアンスの違いであるが，自分の姿勢を崩さないで，政治的な面とは一定の間隔を保ちながらあくまで「己の学問の立場からの慎重な発言」だったと思われる。ただ，一国民俗学に対する認識の差，そしてその一国民俗学を基礎に置いての上記のような柳田の発言は，方法論を巡っての議論にはなりそうな要素をはらんでいると思われる。

そして，本文によると，そもそもこの座談会が成立したのは，当時台湾で出されていた「民俗台湾」（一九四三年十二月号）の編集に当たっていた台北帝国大学教授の金関丈夫と

中村哲が上京し，橋浦泰雄と岡田謙を交えて柳田から話を聞こうと押しかけてやってきた感じの座談会だったと述べている。ところで，上述した「己の学問の立場からの慎重な発言」だったと思われるのは，柳田学において比較的に軽く扱われたのが物質文化（民具等），仏教文化，そして「比較民俗」であった。後の可能性を示しつつも関心が薄かった比較民俗，その比較民俗と関わる問題を，押しかけて来た民俗学関係者の金関丈夫から「東亜の民俗のために」と聞かれた時，柳田は上記の自身の言葉「大きな問題が起る」「考えられる」が顕しているように，やはり一国民俗学という己の学問の立場から慎重にならざるを得なかったのであろう。

さらに著者は，柳田邸に置かれた民俗学研究所を中心として日本の津々浦々をつないだ日本民俗学のネットワークの組織図を植民地（宗主国言語として日本語を通用させうる世界）まで拡大し，柳田邸と植民地研究者（主に帝国大学の教授たち）を結ぶ「大東亜圏民俗学」を構想していたと述べている。さらに，柳田は比較民俗学を否定しながら，大東亜圏民俗学を構想していたと断定している。ここで疑問に思うのは，「一国民俗学」を主張した柳田学において，比較民俗と大東亜民俗学を完全に切り離して考えられるであろうかという点である。というのは，大東亜民俗学が成立するためには，比較民俗の立場をとるか，それとも国民国家主義に基づいて広大な大東亜圏を宗主国の日本という一つの国として見なすかのどちらかであろう。柳田学の思想や方法を念において考えると，他民族からなる植民地を含んでの一国というのは到底考えられないことであろうし，まして比較民俗を時期尚早だと消極的だった柳田が比較民俗の立場をとったはずもない。勿論，このような論理を裏返していえば，著者のいうように，比較民俗（日本と植民地が対等な立場という意味での）を放棄して大東亜民俗学（日本を見いだすための比較で植民地はその資料提供地に過ぎない）に走ったという論理も形としては成立する。しかし，それを裏付ける資料として「民俗台湾」に載った一言のような対談だけでは，資料としてあまりにも乏しいのではないか。実際柳田の膨大な数の論文や講演会の資料の中で「大東亜民俗学」を臭わせる論は殆どといっていいほど見かけられない。それに柳田は，実際植民地の民俗調査に自ら出掛けたり弟子を送ったり，また植民地の帝国大学学者（日本人教授）にこれこれを調査してくれと頼んだり，総督府の委嘱を受け持ったりなどをしたことはほとんどなかった。つまり，「民俗台湾」に載った柳田の言葉を，限られた範囲での失言として受け止めて疑問をもつならともかく，それをもって柳田の思想や学問，延いては日本民俗学の領域までその疑問を広げるには無理があるのではなかろうか。

要するに，一国民俗学（著者はこれを否定的に捉らえている）という自分の学問の中に閉じこもり，間違った帝国主義の思想に対する傍観の姿勢と，回り植民地の住民の苦しみにあまり関心を払わなかったという姿勢が批判にさらされるのならともかく，大東亜民俗学を構想していたという批判は，あまりにも根拠に乏しいのではないかと思われる。

3．柳田と植民地と戦争

(1)戦前柳田学の周辺

さて，座談会が行われた昭和十八年頃の民俗学周辺はどういう雰囲気であったろうか。柳田の思想を検証するにあたって，まずこの時期の時局を探ってみることは，それによって柳田学の周辺と柳田の戦争に対する考えを垣間見ることもできるなど，一定の意味があるだろう。

昭和十八年といえば，戦争が一段と激しくなる一方で，戦場では日本軍の不利な状況が伝えられるようになる。時期であった（もち

ろん一般庶民には伝わってないけれど)。軍部は，国内の思想統制と共に植民地の統治政策にも一層磨きをかけた時期でもあった。民俗学の隣接学問として「民族学」がその政策に歩調を合わせた代表的な存在であったといえるが，その象徴的なものが「大東亜共栄圏百八種族の民族調査」を骨子とする文教政策答申(昭和十七年)と，それを受けた文部省によって設立される「民族研究所」(昭和十八年設立)である。異民族に対する植民地政策の確立を担った民族研究所には柳田と関わりのある人も何人か参加した。岡正雄をはじめとして関敬吾，石田英一郎，杉浦健一，古野清人，江上波夫，泉靖一など二十数人の高名な学者が名を連ねて学問とは裏腹に軍部の思惑通り役割を果たしていた。そういう時代的な背景と時局と学問との関わりを踏まえたうえで，柳田の考えが表れている言動を探ってみよう。

戦時下，機を得たようにいっせいに活動を進めていく民族学に対して，柳田はどのような反応を示したのであろうか。昭和十七年（一九四二）に入って，文部省の大東亜博物館の創設計画にも関わり，大東亜共栄圏内の民族調査の現状を熟知していた柳田は，その年四月に発表した「日本民俗学」(『学術の日本』第一篇，定本未収録）の付記において，民族学に対する民俗学の意義を強調して，つぎのように述べている。

「我々の民俗学の歴史を一通り知ったうえでないと，新たな同情深い視察には這入って行けぬのみか，あべこべに国内の同胞をすら，昔の民族学的態度を以て見下ろさうとする者を制止する途がないかもしれぬ。二つの呼び声を同じくする学問の主従の関係は，自他の為に今や是を明白にする必要が切なのである。」

柳田からみれば，戦時下の民族学的研究は，そこに生活する人びとに対する「同情」の眼を欠いた粗い観察でしかなかったのである。

翌昭和十八年（一九四三）に行われた座談会「民間伝承について」においても，柳田は異民族調査に民間伝承の学の知識を導入することが必要ではないのか，という浅野晃(一九〇一～)の発言を受けて，大東亜圏の調査に触れながら，「私らの同胞にたいして抱いている熱意というものを，すぐに転用してちがった人種に持って行くということは困難なんです。われわれはまだ彼らの霊魂には触れていないからね」(『文芸春秋』昭和一八年九月，『柳田国男対談集』昭和三九年，所収)，と批判した。(柳田国男研究会『柳田国男伝』三一書房，一九八八，P．895)

以上のことをみる限り，柳田は時局迎合的な姿勢をとった多くの学者とは異なった道を歩み，むしろそういう学問や学者に対して批判と危惧の念を抱いていたことが分かる。

(2)柳田と「民俗台湾」

すでに2節で述べたように柳田と大東亜民俗学を結び付ける根拠になったのが「民俗台湾」という雑誌であるが，ここで「民俗台湾」を巡る論を改めて見てみよう。本書では，

柳田は「民俗台湾」という雑誌が出ているのに「これを本当に面白がって読む者は少ないと云ふ」のは，「言葉の相違と云ふ問題が」あって，「朝鮮も『朝鮮民俗』といふ雑誌があったし，蒙疆にも恐らく遠からず出来るでありませうし，満洲にも出来かかってをりますし，北京にも日本文字で書いたものが出るだらうと思ってゐますが，その間の交通を妨げてゐるのは言葉であります」といっている。言葉の違いが「大東亜圏民俗学」の成立を妨げている。柳田国男がここでいっているのはそういうことで，…中略（本書P．8)

といい，柳田が大東亜民俗学を成立させるた

めに，諸民族の様々な言葉に否定的な姿勢で，日本語の普及あるいは暗暗裏の強制を主張したかのような感じを与え兼ねない叙述をしている。しかし，上記の筆者の引用は，柳田の話の一部分だけを取り上げたので柳田の意図や話の真意を探るのに十分ではないと思われる。上記の『民俗台湾』を巡っての座談会の模様は『柳田国男伝』にも取り上げられているが，当然のことながら著者の見方とは大きく異なるので引用してみることにする。

同じく昭和一八年十月十七日，雑誌『民俗台湾』を刊行していた中村哲（台北大学教授，一九一二～），金関丈夫（同，一八九七～一九八三）らが柳田邸を訪れ，民俗学と台湾というテーマで座談会がもたれた際にも，柳田は鋭く注意を喚起している。…中略…柳田は比較民俗学の構想を示しつつ，日本と台湾，朝鮮，フィリッピンなどとの比較研究について，こう述べている。

比較民俗学研究上，日本とこれらの地域の交流を妨げている最大の障害は，言葉の問題である。日本民俗学（一国民俗学）のように，言葉だけで索引を作ることにはどうしても無理がともなうので，最初の共同研究のテーマとしては，総括的なたとえば婚姻，原始信仰，霊地思想，生死観といった題目を取り上げるのがよいのであろう。だが，その場合，日本の民俗，日本の過去に自覚的であることこそ，他民族を理解するための内的拠点である。

「…中略…太陽に対する崇拝の仕方でも，太陽を拝んだり有難がる気持の違ひが幾系統位になってゐるか。文部省の民族研究所などでは，日本人以外のもののさういうことについては，人によると随分細いところ迄やらうとしてゐるのでありますが，自分等はどの状態にゐるかといふことについては，高処の見物です。どうしてもエスノロジーといふものが本当に成長するのは比較民俗学といふか，各民俗学の共通点を濃くして行くところから始まって，自分の赤ん坊の時から知ってゐるものをスタンダードにして行かなければならぬと思ひます。今のままで進んで行ったのでは心細いと思ひます。」

（柳田国男研究会，前掲，PP．895～896）

ここでも，戦前絶対的な権威を持つ政府が力を入れて推進している植民地政策の一環として行われていた民俗調査や民族研究所を慎重な表現を選びながら批判している。そして，「その間の交通を妨げてゐるのは言葉であります」という発言の真意が大東亜民俗学をにらんだものではないことは明らかであろう。

(3)柳田報告書

いま一つ，原住民（植民地民を含む）の使用言語について柳田の考えが表れている文書がある。周知のように，柳田は一九二一年から約二年間国際連盟の委任統治委員会委員を務めたが，第三回常設委任統治委員会の議事録二七九頁から二八六頁まで，付属文書第六号として柳田の報告書が収録されている。その報告書は「委任統治領における原住民の福祉と発展 ― 柳田国男報告（“The welfare and development of the natives in mandeted territories; report by M．Yanaghita”）」（岩本由輝，『もう一つの遠野物語』刀水書房一九八三年，に収録）で，『柳田国男伝』には以下のように記述されている。

最初に気づかされることは，柳田が先住民の人口動態および移住などに伴う人口移動の問題に並々ならぬ関心をよせていることである。すなわち，人の移動・接触は，文化の移動・接触であるとの視点から先住民の文明化と保護を図ろうと考えていた。…中略…つぎに，先住民の教育と使用言語の問題について，柳田はこう述べている。

「原住民の社会的水準の押し上げを目

的とした教育計画と完全に共同体に寄与すべく立案された教育計画とが選択されねばならない。このこととの関連で望ましい影響を及ぼしつつあるものとして挙げうるのは，農業そのほかの基本的生産部門や地方生産物の利用をともなう手工業部門や初歩的とはいえ日常生活に応用される医療部門で施されている訓練である。この計画はすでに成果を挙げつつあり，若干の，特に才能のある青年に最先端の教育を施して彼らを特別扱いにする古い方法にくらべれば非常に優れているようにみえるであろう。経験によれば，この種の最先端の教育は，原住民の発展の可能性の顕著な事例を見つけることができるとはいえ，しばしば原住民の社会構造にはなじまないことがわかる。」

柳田の考えは単純明快であった。すなわち，若干のエリート的先住民に，基本的生活とかけ離れたエリート教育をするよりも，先住民総体としての社会的水準の向上を目的として，日常生活に根ざした教育，いわば実業教育のようなものを目指したのである。

しかし，読み，書き，算盤というもっとも基本的な教育のためにも，なお解決しなければならない重要な問題であった。すなわちその教育のためにどのような公用語を用いるかという問題であった。柳田は当然のこととして，先住民の言葉を採用すべきであると考えた。その理由として，柳田は，「原住民の言葉の採用がずっと当をえているであろうことを立証する事実が少なくとも三つある」と考え，語彙や文法の類似性による学習容易性，学習の自発的動機づけ，特権グループの発生防止をあげている。（柳田国男研究会，前掲，PP．626～627）

以上，柳田の報告書から分かるように，柳田はあくまで自民族の言葉（言語）採用を主張している。著者が取り上げた柳田の「その間の交通を妨げてゐるのは言葉であります」という話は，著者のいうように大東亜民俗学の成立を視野に入れて「植民地民俗学」を語ったのではなさそうである。

一方，本書でも前掲の岩本由輝（1983）を引用して上記の柳田報告書について触れている。第四章で，柳田の主張を取り上げたうえ，次ぎのように付け加えている。

> だが，南洋庁がその行政，教育，文化において採用したのは「国語」としての日本語であり，「原住民の言葉」などは，支配体制からすれば一顧もされていないというのが現実だったのである。…中略…柳田国男が国際連盟での自分の報告を，積極的に自国の委任統治領の行政に反映させようという努力を払った痕跡はないようだが，それにしてもこれだけ意見と現実の行政とが背馳しているというのも珍しいことではないかと思う。南洋庁にとっても，柳田はやはり「向こうの人間」だったのである。（本書P．158）

著者は，柳田が自分の報告を積極的に自国の委任統治領の行政に反映させようと努力しなかった，ということから柳田の報告書をそれほど評価していないようである。また，「意見と現実の行政との背馳を珍しいこと」というが，それは，柳田の報告書が南洋庁の行政に採用されず，原住民からすれば何の役にも立たなかった，ということを強調するための論述にしか読み取れない。しかし，一々具体的な例を取り上げなくても，当時の時代的な背景からすれば，意見と行政との背馳という実態はちっとも珍しくない時代だったのではないか。帝国主義に基づいて国家と軍が絶対的な権威を有した時代であっただけに，それに逆らうような意見を主張し続けると自己破滅につながり兼ねない時代の下で，しかも一九年に及ぶ長いエリート官僚の経験者として，また，国連の委員といっても最終的には日本

外務省の指示に従わざるを得なかった時代に，柳田にとってあの報告書が自己主張の精一杯だったのではないかと思われる。

(4)柳田の戦争観

ところで，大東亜共栄圏・民俗学云々ということは，結局のところアジア侵略や太平洋戦争と深く結び付いている，あるいは戦争によってもたらされた言葉であろうが，その戦争に対する柳田学の姿勢や考え方はどういうものであったか，それを探ってみる必要もあろう。おびただしい数の柳田国男論とか柳田国男の思想，そして回想録などによって柳田の学問や認識は，もう丸出しに近い状態と言っていいだろう。その中には，賛美書もあれば批判書もあるが，戦争に関する部分を大ざっぱにまとめてみると，日本国内が大東亜解放の聖戦に熱狂するなかで「柳田は，決して戦争なんか望んでいなかった」しかし強いナショナリスト所有者の柳田は，「もう始まったからには，日本が負けることも望んでいなかった」という曖昧な表現で表すことができる。つまり，益田勝実が指摘しているように，柳田は「戦争に対して根本的批判は持たなかった」そして，橋川文三の「柳田は少なくとも戦争という国民総体の運命にかかわる大きな疑問に対して，ほとんどなんら答えるところがなかった」という指摘をもって受け止めることができると思う。しかし，だからといって，柳田は戦争を肯定し，ファシズム権力を仰ぐような言動をしたわけではない。ただ，己の学問の領域に閉じこもり，自分の姿勢を貫いたまれな存在だったといえよう。それを厳しく言えば，戦争に対して「現実科学」として機能するところなく任務の一部を放棄したともいえるが，それについて柳田は「現代科学ということ」の中で反省を込めた自己批判をしているし，その反省に基づいたかのように戦後様々な形で精力的に国の立て直しに努め，大きな業績を残したことはたって述べるまでもないだろう。

4．著者の歴史認識と韓国人の歴史認識

改まった感じはするが，ここで本書の著者川村湊氏の経歴を見てみよう。氏は，大学では法学部で学び，文芸評論家という肩書をもっている。現在は法政大学教授であるが，一九八二年から四年間，韓国釜山の東亜大学日語日文科で日本語を教えた経歴をもっている。滞韓している間，韓国の色々な祭りや巫儀に出掛けたり古書を求めて古本屋を漁ったり聞き込み調査をするなど，活発な研究をしていた。韓国事情や韓国の歴史，社会にも詳しく，今は文芸評論のみならず，関心は歴史，宗教，民俗と多方面にわたっている。主な著書は，文芸評論として『異様の領域』『批評という物語』『隣人のいる風景』，そして『〈酔いどれ船〉の青春』『私の釜山』『異郷の昭和文学』『戦後文学を問う』『アジアという鏡』『語霊と他界』等があり，その他，共編書の『アジアの霊魂観』『アジア稲作民の民俗と芸能』『アジア山民海民の民俗と芸能』対談書の『列島と半島の社会史』などがある。

以上，氏の主な著書からも垣間見ることができると思われるが，特に「昭和（戦前）とアジア」関係の内容が多く，その本文では，韓国との関わりに多数の紙面を使っている。氏の昭和とアジアに対する視点は，主にアジア（植民地）の立場に立つ姿勢で，日本人の歴史認識に警鐘を鳴らそうと努める様子がうかがえる。

著者のアジア観は韓国人の歴史認識と非常に近い感じがするもので，筆者も本書を読みながら何カ所か共感するところがあった。批判的な著者の姿勢と韓国人の歴史認識に共通点があるということを裏返していえば，韓国人の日本観が否定的だということになるが，その背景を簡単に探ってみよう。

著者は『列島と半島の社会史』（作品社，一九八八，網野善彦氏と対談形式の書物）の中で，

“韓国では「日本史」がタブーである”と発言しているが，それは紛れもない事実である。独立した日本史の講座を開いているところは殆どなく，東洋史の中でも極めて軽く扱われているのが現状である。韓国で日本史が軽視されているのは，有史以来文化を伝える立場にあったという韓国人の文化的な優越感と自尊心が少なくなく作用しているだろうが，最も根本的な問題は，いわゆる「植民史観」に対する不信感からであろう。本書でも第一章に朝鮮総督府の朝鮮史編纂過程において，日・韓学者による檀君（韓国の建国始祖）論争などが取り上げられているが，韓国からみれば，『朝鮮史』編纂をめぐり，黒板勝美，小田省吾，今西龍など多くの日本の歴史学者の言動は，総督府に操られながら歪んだナショナリズムに陶酔し，他民族抹殺政策の一役を担った御用学者に外ならないのである。それに加えて，戦後歴史認識をめぐって後を絶たない日本閣僚の妄言，未だなされていないといわれる戦後処理問題，そして何より一九八二年に起きた日本の歴史教科書検定をめぐる波紋などは，韓国の人々に「日本史＝歪曲」というイメージを固めさせたのである。

つまり，韓国の小中華思想あるいは文化の周圏論的な考え方から，韓国は長兄分の中国から文化や文物を受け，末っ子分の日本にそれを伝えたにも関わらず，逆にその末っ子に（儒教思想の核心の一つである「長幼の序」を無視して）侵略され，酷い民族抹殺政策の目にあったという正に儒教思想的な屈辱感が少なくなく働いている。さらに，先の戦争についても曖昧な言葉をもって濁すばかりで一向に謝らない日本のやり方から，日本人の考え方は戦前と変わらぬ，機会があればいつでも先の時代に戻ろうという回帰心理が殆どの日本人の考え方でそれこそ日本の本音だ，という危ない日本人象が出来上がっている。日本の一般の人々にとっては途轍もない話であろうが，それだけ両民族の間に深い溝があるといえよう。これには，姿勢をきちんと示さない日本に問題があるのか，正しくない他民族観をもつ韓国に問題があるのか，またそういった認識や姿勢の善し悪しなどは，論理的な話では解決しそうにもない複雑で難しい問題であろう。

これらの問題は，本論とは若干距離がある事柄かもしれないが，敢えて韓国のことを述べさせて頂くということは，著者の滞韓経歴から著者が何らかの形で韓国の影響を受けたのではないかと思われるからである。勿論，著者も学者としての学風や価値観をきちんともってからの渡韓（著者三十才）だったろうが，著者にとって長期間の外国生活は，韓国滞在が唯一で，多かれ少なかれある程度の影響は受けたと思わざるを得ない。それを裏付けるように著者の多くの著書，編書の本文及びあとがきなどには韓国のことが占める割合が高く，本書でも四つの地域の中で韓国のことだけが二章にわたって述べられている。著者の殆どの著書は韓国から戻って来てから出されたし，著者のもう一つのテーマが植民地時代の「日本語文学」や「日本語教育」であることも著者を知るうえで見逃せない。本書を書いた切っ掛けも，あとがきに示されているように，滞韓している時，隣り合った日・韓の「民俗」がお互いを知らないことに驚き，ソウルや釜山の古本屋をまわりながら民俗関係の本や朝鮮総督府の調査資料の復刻本を買い集めて読み，韓国の民俗学史に興味をもってからである。そして，何よりこれから「（東）アジア比較民俗」というテーマが盛んになるに違いない時代に，韓国人の歴史認識や日本のイメージ，そして無茶な反日感情ではなくその背景にあるもの，さらにそれを感情ばかりでむやみに受け止めるのではなく，冷静に考えてみる必要があろうと思ったからである。誠に恐縮であるが，そういうことらを未熟ながら日本に留学して，日・韓両社会を観ることができた，殊に自国である韓国を外から客観

的に眺めることを経験した者の立場で，本書評から大きく外れない範囲でそれらを考え，読者の韓国理解につながればという気持ちからである。

韓国人にとって精神的な側面からの植民史観と共に，「植民地時代の象徴」とされるのが，皇民化（神社参拝），創氏改名，日本語の強制であろうが，そのうち教育や日常生活と最も深く関わっている言語の統制，即ち母語の使用禁止（日本語の強制）は，最も深い傷を残し，日本語の強制は悪名の代名詞のようになっていた。しかし，今や韓国人がその日本語を拒否しなくなってきた。特に経済的な面との関わりが深く日本語の旋風というほど人気を集めている。では，悪名の代名詞のような日本語を許した韓国人が何故日本史に対しては未だその姿勢を崩さないだろうか。日本史には言語（日本語）ほど経済的な魅力がないからということも考えられるが，それよりそこには韓国人の独特の情緒が働いているからである。筆者は，韓国人の情緒を未来志向的ではなく，過去志向的ではないかと思う。というのは，韓国人は受難に点綴した歴史であるが，自分たちの歴史については誇り高き民族で，その歴史の延長線にある自分の存在の意味を儒教に基づく祖先に求めると同時にそれに伴う位階秩序が強調される社会構造を築いた。（小中華思想ともいわれる）誇り高き歴史が，かつて文化小国と思っていた日本の植民主義史観によって踏み潰され，民族の存在だけでなく民族精神までが抹殺の危機にさらされた。国力がなくて軍国主義に国を奪われたことについてはさまざまな側面から反省し，自分たちの愚を認めたり朝鮮内部の問題点を踏まえたうえでの認識を示したりして一方的に“日本悪”との認識ではない。しかし，植民地とはいえ，すべてを認めようしなかった朝鮮統治の仕方に対しては，ひたすら憎悪感ばかりを抱いている。とりわけ，儒教思想の下で体面や精神的な面が重んじられる社会に，日鮮同祖論まで作り上げて精神的な面と関わる民族抹殺政策を仕掛けて来た。その先頭に立ったのが外ではなく歪曲の日本史であり，そういう日本史を韓国人は未だ許せないのであろう。（勿論，このような思想の背景にいわゆる韓国ナショナリズムと戦後反日教育政策も少なくなく作用していることは否定できない）

5．戦前の朝鮮民俗研究

(1)朝鮮民俗調査

前節で述べたような韓国人の歴史認識からすれば，著者が取り上げた範囲だけでなく，戦前になされた日本人学者による朝鮮歴史・民族・思想論はもちろん民俗調査までも，すべて植民地統治のために行われた下調査のようなものという認識で，批判されて当然という考えが支配的である。戦前の朝鮮研究の中には純粋な学問的発想で行われ貴重な研究や資料もある程度存在するが，それらも植民史観という名の下で正当な評価を得られないのが現状である。そういう複雑な歴史認識をめぐる日・韓の駆け引きの中で，戦前日本のやり方に批判的な目をもつ著者は結果的に韓国の立場に立ったとも映るが，その批判の的を民俗学の範囲にまで広げるには，もう少し慎重かつ丹念な調べが伴われるべきではないかと思う。

もちろん，本書に取り上げられた戦前朝鮮半島の民俗調査においても総督府の関与や政治的目的からという実態は，変わらぬ史実で，官憲の報告に頼るという方法や，支配者の立場からという姿勢にはなお疑問が残るが，少なくても朝鮮民俗の事例を文書として残すことができたという一定の結果は認めざるを得ないのである。

本書では警察官として朝鮮民俗研究に従事した今村鞆の研究について

> 秋葉隆の言葉によれば，「朝鮮民俗の処女航海」ともいうべきものだったのである。…中略…『朝鮮風俗集』の中に「李

朝の刑事警察」とか「朝鮮人の犯罪」「朝鮮人に対する官命の効果」「朝鮮人の迷信及び宗教」「朝鮮の迷信業者」といった項目があるのは，まさに今村鞆の「職務に関係深きもの」にほかならない。(本書PP. 47～48)

と述べている。

今村鞆に継いで，総督府の嘱託を受け民俗調査にあたったのが村山智順であるが，氏の調査資料集は，朝鮮総督府の名義で次々と出版された。調査資料について現代韓国人研究者の評価を本書から再引用すれば，

村山智順のまとめた民俗学的調査資料は，その徹底した網羅性と広域性，行政・司法の末端機関を総動員して集めた膨大な量によって，現在まで無視できない価値を持っている。とりわけ現在では民俗調査の困難な北朝鮮地域について，また，すでに湮滅，消滅した民俗事象については独自な価値をもつといわざるをえない。(北朝鮮での民俗学については，チ・ウニと朱剛玄の共著『北韓民俗学史』(理論と実践，一九九一，ソウル)(本書P. 50)

さらに著者は，植民地主義的民俗調査としてその偏向性，収奪性について厳しい批判に晒されているといった二面性の評価があることは否定できない，と付け加え述べている。実際，当時朝鮮民俗学の先駆者的な存在の孫晋泰は村山の資料の収集方法，整理，分析において，その誤りの例を取り上げながら厳しい批判をしている。(本書PP. 52～55参照)

そして，学問として朝鮮文化を研究した当時京城帝国大学教授の秋葉隆の研究が取り上げられている。秋葉は，最新のイギリス文化人類学，社会学に学んだ方法論を身につけており，学問的な理論，方法論を朝鮮の民俗学に持ち込んだ業績は大きい。氏の『朝鮮民俗誌』『朝鮮巫俗の研究』などは，今でも多くの韓国研究者によって引用されるなど一定の評価を得ている。その一例として，秋葉が示した「朝鮮社会における文化の二重構造モデル」が挙げられる。つまり，朝鮮社会といえば，一見，男性中心で儒教文化だけが極めて顕著な社会のようにみえるが，その内部（底）には女性同士のネットワーク（例えば「契」と呼ばれる頼母子講など）や経済活動，そして民間信仰といった女性文化があり，精神的にも社会的にも少なくない影響力をもっている。言い換えれば「上層―男―儒教―漢字―祖先祭祀」という系列に対し，「下層―女―巫俗―ハングル―土俗信仰」という系列の文化の二重性である。当時，このような文化の二重構造を朝鮮人研究者自ら気づくことができなかったのは当然なことかもしれない。つまり，新しい研究方法をもって，客観的な立場からではないと，見いだすことができない構造だったといえよう。

一方，著者は，上記の秋葉の業績などを踏まえたうえ，

秋葉隆の功罪は，近代的学問としての朝鮮民俗学を成立させたということであると同時に，それはまた知的，文化的簒奪の形式としての「近代的」学問，アカデミズムの形式にほかならないということもできる。(本書P. 79)

とやや厳しい評価を下している。

(2)朝鮮民俗と柳田

ところで，これらの朝鮮民俗の研究者たちと柳田との関わりは，それほど深いものではなかった。この点については，著者も柳田やその弟子たちが総督府の委嘱を受け朝鮮の調査に出掛けたことはあまりなかったと述べている。しかし，著者はそれを意図的な「柳田学において朝鮮不在」と断定している。さらに著者は，柳田が比較民俗学を否定したのも，日本民俗文化の源流を“南”に求めたのも，朝鮮からの人や文化の伝播説を封鎖するためだった，と主張している。そういう側面からの見方は，国文学者の村井紀の批判が注目を

集めたことは周知の通りである。村井によると，柳田は法制官時代に日韓併合に積極的に加わったという負い目があり，それが彼の内部において朝鮮への関心，研究を隠蔽，抑圧させることになった，という。また，岩本由輝は，上述した国際連盟の常設委任統治委員会での柳田報告書と結び付けて，こういっている。

> …中略…そうなれば「国歌や歴代天皇の名前」云々ということは，そのまま“君が代”の斉唱や神武から今上（当時の大正天皇まで一二三代）にいたる天皇の諡号の暗記を現に朝鮮や台湾の人々に強制している日本の植民地における教育の在り方の痛烈な批判となっているのである。おそらく報告書が英文で書かれ，常設委任統治委員会の議事録というあまり人目に触れるものではなかったから，こうしたことが大胆にいえたのであり日本文では，こうした直截な表現はできなかったであろう。しかも，柳田が法制局参事官であった頃の一九一〇年（明治四三）年八月，内閣の仕事として日韓併合に関する法制作成を担当し，一九一一年六月一三日，日韓併合に功績があったとして勲五等瑞宝章を授与されていたという事実があるということを知れば「国歌や歴代天皇の名前」云々は柳田の自己批判とみることもでき，一九一九（大正八）年三月一日に勃発した万歳事件に象徴されるような朝鮮独立のための反日運動の原因を柳田がきわめて複雑な心境で眺めていたことがうかがえる。（岩本由輝『続 柳田国男・民俗学の周縁』柏書房，一九八三，PP．69～70）

そして，このことについて『柳田国男伝』には次のように記している。

> …中略…朝鮮合併に尽力のあった内閣，枢密院，外務省，朝鮮総督府所属の高官九二名に対して叙勲行賞があった。…中略…行賞の対象となった高等官九二名のうち，柳田は四六番目にランクされている。序列はちょうどその真ん中であった。…中略…柳田は日韓併合に関する法制作成過程に，相当深く関わっていたのである。
>
> 周知のとおり，韓国併合に関する日韓条約（明治四三年八月二二日調印）は，日本帝国主義の朝鮮侵略と植民地支配の完成を意味するものであった。柳田は，合併後の朝鮮支配のための法制作成に参画したのであったが，朝鮮民族に癒すことのできない傷痕を残すことになったこの歴史的大事件について，完全に沈黙を守っている。（柳田国男研究会，前掲，PP．324～325）

やはり，柳田にとって朝鮮という存在はただ植民地の隣の民族というような何気ない存在ではなかったであろう。柳田を否定的な視点からみる本書の著者はともかく，中立的でやや肯定の側面をもつ二冊の書にも柳田がある感情をもって朝鮮に背けたようなニュアンスが漂う。ある感情を抱いていたことは間違いないようであるが，引用文のように完全に沈黙を守ったので，その感情の解釈は読者に委ねるしかないと思われる。

既に述べたように柳田は確かに戦争を望んでいなかったが，積極的に反対もしていなかった。“戦争と柳田”を考える時，あれほどほとんどの日本人が，とりわけ多くの知識人が戦争に何らかの形で巻き込まれて行った中で，柳田はその学問と思想視角に不変を貫いた存在だったことは確かである。それを裏付けることとして，上記したように柳田の民族研究所への批判，堀一郎，和歌森太郎などが参加した「国民精神文化研究所」に直接関わることを拒否したこと，戦争末期に大政翼賛会への協力を拒んだこと，国語界の大学者山田孝雄をはじめとして多くの国語学者が海外支配に伴う日本語普及に狂気的になったが，それ

を批判ないし冷静に対応したことなどが上げられる。そこからは，信念と毅然とした学問への姿勢がうかがえる。

6．柳田の誤り

しかし，柳田はもう一つの惜しい誤りを残している。後藤総一郎の『柳田国男論』から引用してみる。

> 最後にたった一つ，柳田が心を配り，書いてくれたわたしたち「小国民」世代のための『村と学童』に感謝を捧げつつも，昭和一九年一月一日付で発表作成された「愛国いろはかるた」の選定委員の一人に，柳田が名をつらねていたことを思うとき，柳田も結局とこかでファシズム権力に，われらガキの魂を売り渡したな，という感慨がふとよぎる感情をわたしは抱かざるをえない…中略…
>
> 柳田をはじめとする彼らが，どれほどこのかるたの制定に立ち入ったかは知らぬが，ともあれ，暗い灯火管制の貧しい正月のなかで，幼い魂にこのかるたのイメージをやきつけ好戦的な少年に育つことに，すべてのエネルギーを私たちが昇華させつつあったことだけは事実であった。（後藤総一郎『柳田国男論』恒文社，一九八六）

要するに，戦争並びに戦前の軍国主義と柳田を考える際，法制官時代の朝鮮統治のための法制作成に関わったことと愛国いろはかるたの選定委員のことを除けば，柳田がまれな存在であったことに変わりはない。ところが，激動の時代に毅然とした姿勢で己の学問を貫いたまれな存在であったことに注目すれば批判は免れるかもしれないが，「責任」ということになると，やはり考えさせられるであろう。民族研究所，国民精神文化研究所，大政翼賛会などに不参加，そしてファシズム権力に煽られるような言動を差し控えた，とはいうもののこれらの事柄は柳田学とは全く別個の世界であると言い切れるであろうか。これらの研究所に，柳田本人こそ参加してないものの，少なくとも柳田と関わる多くの学者が参加していたし，ただの学者ではなく近代日本において一つの学問を切り開いた時代を代表する大学者としての一定の「責任感」は持つべきであろう。そういう責任感を柳田は「現代科学ということ」「村と学童」といった論文を通じて明らかにしたと思われるが，今日においては，柳田学を受け継いだ人たちがその責任感も一緒に受け継ぐべきではなかろうか。

最後に，あれだけきちんとした性格の持ち主だった柳田であったが，結局，回りの民族に対する学問的な責任感ということになると，必ずしも明らかにしていなかった。日本の立て直しが第一の使命だった戦後間もない混乱期はともかく，偉大なる学者の生涯を閉じる一九六二年まで一七年間もの歳月を沈黙で一貫した。柳田が回りに対する学問的な責任感を感じていたかどうかは，勿論わからない。もし，感じていたとすれば，戦後江上などによる「騎馬民族征服説」の台頭に，それを明かす機会を奪われたとも考えられるし，また最後まで自分が築いてきた学問の筋をそのまま貫きたいという考えだったかもしれない。いずれにしても，これが著者のいうような，柳田学の限界かもしれないし，また一国民俗学のナショナリズムであるかもしれない。

これを克服することが現代民俗学における課題の一つであろうが，上記の“柳田学を受け継いだ人たちがその責任感も一緒に受け継ぐべき”といった筆者の主張もこれらのことの克服を視野にいれての意見である。克服には，日本，韓国，中国といった「東アジア比較民俗」という方法論も一つの方法であろう。実際，最近になってこのような比較民俗研究に活発な動きがあり，やはり「時代的要請」と考えてよかろう。ただ，比較民俗という学問を遂行するにあたって，東アジア各国はその独特の個性を捨てなければならないと思う。

具体的には，中国の中華思想，韓国の小中華思想あるいは民族主義，日本の一国中心民俗学（日本を中心とした華夷秩序のような意味での）は，各自捨てなければならない。これら各国の思想は，昔のことのように感じられるかもしれないが，まだまだそれぞれがそういう傾向を根強く保っていることは否定できない。これらの共通点は，全てが自己中心的で自国を周圏の中心に据え，回りは，自国・自民族を見いだすために用いる資料として調べられるのみである。この問題については，著者は，

> 文化の伝播や影響関係を考える時に，それを上下の優劣関係に即応させてとらえようとすることは過りであり，また，ある国，ある民族の民俗的事象を解明，説明するためだけに，他国・他民族の事象を引き合いに出し，それを全体的な文化の構造体の中から“切り取って”例証とするには慎重でなければならない。（本書P．13）

と主張しているが，筆者も全く共鳴するものである。もちろん，だからといって，「比較は自分の足元から」という方法を否定する訳ではないことは言うまでもない。

7．おわりに

以上，柳田と大東亜民俗学との関わりを柳田の思想という側面から探ってみた。本論文を書くにあたって中心的な１次資料となった『「大東亜民俗学」の虚実』という書の性格は，確かに民俗学のことを書いてはいるが，戦前政治・国際情勢，歴史的史実などが絡み合い，著者の主張を尊重とも批判ともできないと思われる。ただ，日本民俗学外部からの批判書であることは間違いないが，歴史認識をめぐり対アジアとの葛藤を考えると，本書はむしろ日本人学者という内部からの批判であるかもしれない。そして，韓国の方も最近，「共に生きる東アジア」「真の国際化」という次元から，そしてナショナリズムに捕らわれ過ぎていたという自己反省から，日本の再評価や再認識がひそかに広がっているのも事実である。そのような現象を裏付けるように，韓国の社会人類・民俗学者の　崔吉城氏（広島大学教授）は，「韓国巫俗研究を通してみた民族主義」（『韓国民間信仰の研究』啓明大学校出版部，一九八九，韓国大邱）という論文で，巫俗研究に限定してのことだが，朝鮮民俗学が朝鮮民族主義と結び付いている傾向を批判している。氏は，朝鮮（韓国）の巫俗研究の目的と傾向に二つの時期を設定しているが，一つは解放前（戦前）の「独立的民族主義」の傾向であり，もう一つは「独立的民族主義を基盤としながら，近代化の反対給付的傾向」である，としている。（本書PP．87～88参照）韓国では，被支配民族として，圧迫に耐え，支配に生き残るためには，民族主義にならざるを得なかったという論が強いが，それを押し切っての韓国内部の批判であり，注目すべきだと思われる。さらに，同氏は最近もう一つ「韓国も植民地時代＝絶対悪の歴史観から脱却すべき時だ」（『SAPIO』小学館，一九九七年三月二六日号）という論を日本の雑誌に載せたことも大きな意味をもつといえよう。　ところで，上述したように韓国のナショナリズムと戦前の歴史が絡んで韓国に“日本史不在”ということは確かであるが，逆に日本に“韓国不在”ということも否定できないであろう。韓国に日本史不在については自分なりに述べてみたが，日本に韓国不在の現状も相当複雑なものである。文化においても，自国からの伝播説に拘る韓国と，朝鮮というのは，そもそも中国文化の輸入のための一つの「通り道」に過ぎなく，あるいは，史実に少々反しても確実な証明がない限りできるだけ中国から直通経路を辿ろうとし，韓国の存在を認めようとしない日本との葛藤にも溝は深いといえよう。

ただ，このような現象に関わる色々な論のうち，著者のいうような柳田学における「比

較民俗学忌避と朝鮮排除」という主張がその一要因ではないことを願うばかりである。今日の日・韓関係を語るのにしばしば「反日嫌韓」という語が用いられるが，両民族の感情のもつれをほぐすように努めるのも学問や学者の使命であると考える。

参考文献

柳田国男研究会『柳田国男伝』三一書房，1988

岩本由輝『続 柳田国男・民俗学の周縁』柏書房，1983

岩本由輝『もう一つの遠野物語』刀水書房，1983

後藤総一郎『柳田国男論』恒文社，1986

福田アジオ「初期柳田国男の研究と現代民俗学」『歴史学と民俗学』吉川弘文館，1992

網野善彦，川村湊『列島と半島の社会史』作品社，1988

谷川健一，宮田登「いま柳田国男とはなにか」『国文学』学燈社，第27巻1号，S57年1月号「柳田国男・その根源と可能性をもとめて」『国文学』学燈社，第38巻8号，H5年7月号

川田稔『柳田国男の思想史的研究』未来社，1985

福田アジオ『柳田国男の民俗学』吉川弘文館，1992

新刊紹介

廣田律子著
『鬼の来た道―中国の仮面と祭り―』

岩手県の北上市に“鬼の館”と呼ばれる鬼をテーマとした博物館がある。岩崎の鬼剣舞で有名な地に立地しているが，その展示を見ると「鬼」であらわされる形態と性格の多様性を再認識する。本書は日本の民俗信仰を読み解く鍵ともなるこの鬼に焦点を合わせ，その源流を訪ねて，中国の民衆の間に残る仮面劇，儺戯の実地調査の成果に基づいた論考である。著者は漢族の扇鼓神譜，壮族の師公舞，土家族の儺堂戯・毛谷斯，彝族の撮泰吉，仫佬族の儺戯の現地調査を行い，すでにその幾つかについては詳細なレポートをしているがその総合・考察編として読み進むことのできる内容でもある。

構成は，鬼の魅力―まえがきにそえて―，―鬼の来た道―日本と中国の接点―，二　来訪する神々，三　神々の素性，四　神と人との交流，五　祭りの秘儀，あとがきとなっており，巻末には現在まで報告されている資料に基づく中国追儺劇分布図が載せられている。

本書で，著者は儺戯は除災と招福を願う信仰と仮面劇が結合したもので，演劇の原形を伺わせる芸態をとることを各地の事例で紹介した後，中国の鬼は単に死者や祖先を表すだけでなく，見えない・災をなす鬼と見える・災を払う鬼の二性格が認められ，後者が鬼神として祀られるとき恐ろしい風貌を与えられるが，日本ではこの形象は見えないはずの追われる悪鬼の側に与えられるとの興味深い見解を展開している。儺戯については田仲一成『中国巫系演劇研究』(1993)により詳細な儀礼の分析研究が成され，また諏訪春雄『日中比較芸能史』(1994)では日本の民俗芸能の特質が儺戯との関係で論じられ，折口信夫の芸能論の再検証が行われているなど，日本の研究者の現地調査に基づく瞠目すべき成果が上がっている。著者の研究もこの流れに連なる。日本のみならず，この仮面劇，儺戯の研究は中国，韓国，台湾の民俗学の中でも最も調査研究の進んだ分野の一つでもある。来年の元宵節を中心に邯鄲で中国儺戯学研究会主催の国際学術研討会が予定されている。比較民俗研究の望ましい形態が着々と進んでいるのである。(佐野賢治)

B6判　299 頁　玉川大学出版部
1997年3月刊　3090円